Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-10-07

海老名弾正の思想と朝鮮ー「神道的」キリスト教についてー

金，文吉

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
1987-03-31
(Date of Publication)
2014-03-14
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲0699
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1000699

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

〔2〕

氏名・(国籍)	金(キム)　文吉(ムンキル)　(大韓民国)
学位の種類	学術博士
学位記番号	学博い第105号
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
学位授与の日付	昭和62年3月31日
学位論文題目	**海老名弾正の思想と朝鮮** **—「神道的」キリスト教について—**
審査委員	主査　教授　戸田芳實 助教授　眞方忠道　助教授　鈴木正幸 教授　桂　圭男　教授　布川清司

論文内容の要旨

本論文は，キリスト教がかかえる一般的問題，すなわちキリスト教と伝統思想の関係，教会と国家の関係，の問題，とくに前者の問題を明治期日本のプロテスタントに即して考察したものである。この問題に関する明治期日本プロテスタントの態度については，信仰の純粋性や正統性のみを追求した内村鑑三や植村正久を一方の極，伝統的思想との同一化を行った海老名弾正を他方の極としうる。内村・植村の研究に比して海老名の研究は少ないが，キリスト教の流布＝土着化に於てキリスト教が伝統（土着）思想により何らかの変容を受けることが必然であるとすれば日本キリスト教思想史研究にとって伝統思想との同一化を行った海老名のキリスト教思想を分析することは不可欠の事であろう。以上が著者の海老名研究の趣旨である。本論文は6章，152頁(400字詰原稿用紙換算約380枚）からなっている。

第1章　序　論

1．熊野義孝の方法，すなわち@海老名の思考方法・思考枠を彼の儒教的教養と宗教体験から解明する方法ⓑ彼の神学思想を時代状況との関連で解明する方法を継承し，

2．土肥昭夫の@に関する結論すなわち「摂取包括の論理」と「連続性に媒介された完成成就の方法」および吉馴明子のⓑに関する結論すなわちキリスト教と伝統思想の接合の結果，キリスト教（の神）の超越性を希薄化させるとともに，日本の「国家魂」とキリスト教のロゴスの根源的同一性を主張することとなり，国家の行動を規制する内面的規範を失い，ロゴスによる日本の対外膨張の正当化を行ったということをより発展させ，

3. しかも三者に欠けている問題点，すなわち海老名の「神道的」キリスト教によって海老名の意図が転倒してしまったことを転倒の原因と結果について考察する。非キリスト教的風土におけるキリスト者は，内村の如き対決型を除けば常に伝統思想への埋没化の危険が伴う。埋没化すればキリスト教の固有性は失われ，伝道はその意に反した結果（転倒）を生む。したがって転倒分析はキリスト教の土着化にとって普遍的意義を持つものである。この普遍的問題の特殊戦前日本型の典型として海老名の「神道的」キリスト教思想がある。以上の如く著者は本研究の分析視角・方法および意義を設定する。

第2章　海老名弾正の生涯

海老名の前半生（1856～1890年）を概観し，①武士的精神すなわち生死を賭すべき忠誠対象探索の問題として神の問題が海老名の中に位置づけられたこと②その結果，主君への職分（忠誠）の延長上に神への職分が位置づけられたこと③同志社時代の宗教体験（霊感）により，神との関係がそれまでの君臣職分的関係から〝神を愛し神に愛される神の赤子〟の関係へと発展したこと④1887～90年の熊本教会時代に神道とくに平田神道を本格的に研究したこと，を指摘する。

第3章　海老名弾正における「神道的」キリスト教

本章は本論文の中核であり，転倒の原因が述べられている。まず，明治期キリスト教指導者の共通性として①儒教的教養を前提にしていること②幕藩体制解体によって忠誠対象を喪失し武士的価値観の危機からキリスト教に入信していること③明治20年代の天皇制国家確立期に直面して，国家とキリスト教，事実上の国教たる神道とキリスト教をいかに関連づけるかが不可避の課題だったことをあげ，そこにおける海老名特徴は何であったかを問う。

第1節　思想形成と儒教

土肥昭夫の指摘に従い，海老名の儒教的教養を朱子学・横井小楠の実学・陽明学とし，①朱子学からは「理」における自然法則と道徳規範の連続性にあらわれた異質のものを連続的にみる連続的思惟方法と，性善説すなわち徳目を超越的理念としてではなく，人間性に内在しているとみる観念から超越に対する内在の優位の思想を継承し，②小楠の実学からはその経世論の基礎にある人格的天（天帝）観念を継承し，これによってキリスト教的人格神への接近が可能になったとした。そしてこのことが同志社時代の宗教体験すなわち神＝子たる自己に対する父の確信をもたらしえたとした。陽明学の影響も小楠の実学からの影響と同様であるとしている。

第2節　海老名弾正のキリスト教思想とその諸特徴

キリスト教の基本問題すなわち神論，キリスト論，贖罪論，歴史解釈における海老名の特徴が示される。

神論　キリスト教の特徴は，唯一神論（三一神論）と神の超越性にあるが，海老名は①超越に対

する内在の優位の思想から，万有を神が貫き万有に神が遍在するという遍在神観をもち（そのことは同志社時代の宗教体験すなわち神人＝父子関係自覚が〝父我にあり我父にあり〟というかたちであらわれたことに示される)。③しかも,「相違したものを自己の内に統合包括することによって新しいものが生み出される」という連続的な統合思考により超越神観は遍在神観の中に統合包括されそれに連化発展すると考え，したがって異質の存在（儒教）もキリスト教に統合包括され，それに進化発展すると考えた。

キリスト論　海老名は,キリストはキリスト者の究極目標たる神人合一をなしとげた人間であり，キリスト者はその究極目標に向って生きるのであるから，キリスト者とキリストの差異は質的差異でなく発展度の相違（量的差異）にすぎないと主張する。ここでは正統的解釈たるキリストの歴史的啓示の一回性が否定されるが，これは異質のものの中に同質性を見出し，より高次のものへと連続的に発展してゆくとする海老名の考え方の必然的帰結である。この結果，三位一体説は独自の解釈を与えられる。すなわち「子なる神が人となったことは，人を神になさんとする為」との解釈がなされた。そしてこの考え方は次の贖罪論における「神学上の欠陥」を生み出した。

贖罪論　贖罪論とは,「罪人」の救いのための神の特別の行為としてのキリストの事実（苦難・十字架・死）の意味を解明することを目的としている。海老名は，キリストの死（贖罪）を神の「義」や審判としてではなく，神の愛と感化としてとらえ，この神の愛と感化は，人をして神との人格的交りを，その究極たる神人合一にまで高めしめるための媒介であると理解した（この結果，キリストの死は神と人が合一するための献身的犠牲の一事例にすぎなくなり，キリストの歴史的啓示の一回性否定と同様，キリストの死の独自性は否定されることになる)。このため，人間の罪は神への反逆でなく，神とのあるべき関係(神人合一)の不十分性に解消され，したがって神の「義」は神の愛の中に統合包括されその固有性を失うこととなり，原罪の意味喪失となって正統神学からみた「欠陥」が生み出された。そしてこの人間の罪の深さ軽視は，神との断絶性あるいは神の超越性軽視へと連った。

歴史解釈　海老名は神は人類に内在するという遍在神観をとったため，人類史を徐々なる神（隠れた真理）の発現過程と理解した（進化発展史観)。したがって「神の国」も終末論的なキリスト再臨で実現する聖国と考えず，最終目標であると同時に人類が徐々に実現してゆくものであることになる。

以上のような独自解釈を可能にしたのは,「連続的統合包括」思想と「超越に対する内在の優位」思想という儒教からひきついだ考え方と，宗教体験によって獲得した反ドグマ主義（主体的体験から遊離した教理の他律的支配への反発）であった。

第3節　海老名弾正の「神道的」キリスト教

明治中期の天皇制国家確立以降，日本のキリスト者は事実上の国教たる神道への対応を迫られたが，海老名はそれへの独自の「解決」を行った。海老名の神道解釈によれば，神道は本質的には八百万神（多神）を統括する万物創造神（一神）を至高至尊とする一神教的なもので，日本の

歴史の発展とともに，その本質は徐々に姿をあらわしたが，明治維新すなわち天皇制国家の成立によってその一神教化のステージが完成を迎えることになったという。この神道一神教論は神道とキリスト教を同質化するための第一の条件である。第2条件は，海老名が神道とキリスト教は敬神という点で同一であるとした点である。万有に神が内在しているとする海老名は敬神という普遍的なるものがそれぞれの歴史状況の中で特殊化したのがキリスト教と神道であると主張した。ただし，これまでの神道（旧い日本精神）は特殊的なもの（狭い民族宗教で多神教的）であるから，より普遍的なキリスト教に媒介されて「新日本精神」にならなければいけないことを強調した。以上のような海老名の「読み込み」はキリスト教の土着化のためのひとつの方法として「独自性は正当に評価されねばならない」（P.61）と著者は言う。

著者は，しかし，土着化させようとする「意図の正しさは結果を正当化するものではない」（P.61）として，結果が意図に反して転倒してしまうことを問題にする。この意図に反する転倒とは，キリスト教を土着化（定着）させようとしてかえって埋没化しその説く内容が非キリスト教的になってしまうことを指すが，海老名に即して言えば，神道（土着思想）のキリスト教化の意図が結果的には神道化に帰結した事である。すなわちキリスト教のロゴスと神道＝日本精神の同一視（読み込み）は，その融合した新日本精神こそ真のキリスト教精神であり，日本こそ「神の国」を実現しつつある国であるという「転倒」をもたらしたのである。なお第5章で触れられるように，海老名は，日本は印度・中国と異なり，個人の聖人を生み出さなかったかわりに，これらの聖人の教えが国家魂に凝集されたとして民族精神は国家精神として現れたとし，民族即国家を弁証する。したがって日本の国家精神こそ真のキリスト教精神であるとするのである。この転倒の結果が時代状況の中でどのように発現するかが以下の章のテーマであり，そのことを日本近代にとって決定的重要性をもつ戦争と植民地に関する海老名のあり方から検討する。

第4章　海老名弾正の戦争論

ローマにおける公認以降のキリスト教には戦争絶対反対論から積極的肯定論まであり，したがって否定論も肯定論もともにキリスト教的でありうるとしたのち，日本キリスト教界は戦前は多く肯定論であったと指摘し，海老名の戦争論をキリスト教内在的にすなわち聖書解釈のあり方の問題として考察する。

海老名は，新約聖書が一義的に戦争を否定していないこと，旧約聖書が肯定的であることから自衛の戦争を肯定する。また新約聖書の，悪霊に対するキリスト者の信仰の戦い（霊的戦争）肯定を拡大し，肉体の自衛の戦争肯定から，国家の自衛の戦争まで肯定する。こうした〝飛躍〟の裏には，聖書の厳密な解釈（ドグマ）より体験（実感）を優越させる海老名の態度があり，それによって聖書の恣意的解釈を可能にし自己の主張の弁明に自由に利用するという彼の特質があった。さらに，「新日本精神」の膨張こそ真のキリスト教精神の膨張とする彼にとっては，戦争による日本の膨張＝「新日本精神」膨張の舞台の拡大は，キリスト教精神を広める上でも重要な事柄であったのであると結論づける。

第5章　海老名弾正の朝鮮伝道論

朝鮮伝道は，日本的でないもの（朝鮮）を日本的なものすなわち「新日本精神」＝真のキリスト教精神に同化するものと考えたから海老名にとってきわめて重大な事柄であった（他の教会が行わなかった朝鮮人に対して海老名の組合教会が伝道を行った理由はここにある）と位置づける。

第1節　日本組合教会の朝鮮伝道開始と海老名弾正

1910年の朝鮮併合ののち，反日運動の中心に朝鮮キリスト教徒が居たため，寺内正毅朝鮮総督はまずキリスト教徒を同化させるべく日本の教会に伝道を依頼した。海老名はこれを快諾，1910年の組合教会総会で朝鮮伝道を決定した。布教は政府・財界・総督府の援助の下に行われ，それは「神の子たらしむ」と「忠良な臣民たらしむ」を同時に行うものであり，キリスト教儀式の形式で日本の国家儀式を行うという方法すらとられた。このため，1919年の三・一独立運動以来信徒は減少し，1921年組合教会は朝鮮伝道部を廃止するにいたった。(以上の事柄のほかに伝道過程が詳しく記されているが省略する)

第2節　海老名弾正の日韓併合観

1．海老名の朝鮮併合の正当化根拠は，ⓐ韓国は事大主義を国是とせざるを得ないⓑ外に日・露２大帝国が存在するので韓国の国是からしてどちらにつくかが問題となるⓒキリストは「人は二主に事ふべからず」としているが国家も二主に仕えるべきでないⓓ韓国は日本と「同一種」の民族であり，「同一種」の民族が合同するのは世界の「常例」であるから日本に合同すべきであると言うものであった。この合同のあり方は神と子の関係と同様，「神の国」日本への子の関係＝父子関係であるべきだとし，そこから従属関係的「同化」が導き出される。

2．但し，この「同化」は合併という政治的事柄だけではなく「新日本精神」＝真のキリスト教精神を受容させることによってはじめて完成する。それゆえ「同化」は〝奪う〟のではなく福音を与える（愛の）行為であるとして正当化される。

第6章　結　　び（及び「補論」）

1937年から朝鮮民族に強制される神社参拝を海老名がどのように合理化・正当化したかが示され，海老名は神道を国民道徳＝多神教的側面と一神教的本質に分け，朝鮮民族が後者に「同化」することを求めるが，神社参拝的神道＝多神教的神道もキリスト教と本質を同じくする一神教的神道に進化発展（本質顕現化）するのであるからキリスト者はその進化の手助けをするため神社参拝を否定すべきでないと主張したとされる。

最後に「まとめ」で既述の要点を整理している。

論文審査の結果の要旨

1. 日本思想史研究，特に近代日本思想史研究にとって外国からの継受思想の土着化に伴う思想内容の変化に関する研究は必要不可欠である。また，その思想内容の変化が結果的に何をもたらしたかを考察することも必要である。特に，多神教的風土の日本でのキリスト教思想の継受については，「土着」が「背教」の危険性をより強く伴ってあらわれるが故に，外来思想継受の際起る諸矛盾を鋭くあらわす例として，キリスト教思想の土着化の研究は，近代日本思想史研究上，欠くことのできないものである。本研究は，それに正面から取り組んだものといえる。
2. キリスト教の日本への土着化を考察する場合，そのひとつの極限的形態としての海老名弾正思想の研究は，これまた不可欠であるが，彼の儒教的世界観・思考様式とキリスト教との関係についての従来の研究成果を吸収し，新たに神道とキリスト教との関係を明らかにしたこと，特に，神道という土着信仰をキリスト教化するという海老名の意図が，意に反してキリスト教の神道化に結果してしまったことを明らかにしたことは本論文の独創的な知見といえる。
3. 近代日本思想の重要な評価基準である戦争観と植民地観を海老名に即して研究したことは評価しうる。すなわち，海老名の戦争肯定論が，聖書の「自由」な解釈によって正当化されていること，そしてその「自由」な解釈は彼の宗教体験にもとづく反ドグマ主義によって可能となったことを明らかにしたこと，および海老名にとって朝鮮（伝道）は何であったのかという新しい視点から，海老名の組合教会の朝鮮伝道が，彼の「神道的」キリスト教思想の必然的結果であったことを思想内在的にあきらかにしたことは，本論文の独創的な知見であるといえる。
4. 本論文は，海老名弾正の思想の研究，日本キリスト教思想史研究に，以上のような新たな知見を加えたが故に，今後の海老名弾正研究，日本キリスト教思想史研究は本論文を避けて通ることはできないと言えよう。
5. また，本論文のなかで，海老名のキリスト教精神と民族精神の関係づけの特色を，ワイマール期，ナチス期のドイツの神学者達の場合との比較検討において明らかにしようと試みたことは，比較研究を重視する文化学研究科の方針を受けとめようとした姿勢のあらわれと言えよう。
6. なお，若干の問題点として，海老名の対極に位置するところの内村鑑三，植村正久らの思想および正統神学という対比すべき思想の内容の説明が十分でないこと，海老名の神道のキリスト教的「読み込み」が，キリスト教の神道化という「転倒」といたるそのプロセスが必ずしも明示的に記述されていないこと，海老名の反ドグマ主義が主として彼の宗教体験そのものから説明されていて，実感信仰の日本思想史上の位置づけが弱いこと，史料解釈，史料引用の一部に若干の難点があることがあげられる。しかし，これらはいずれも今後の著者の研究の進展によって解決可能であると考える。

以上の理由により，審査委員は，論文提出者　金文吉が学術博士の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判定する。